

地方地者

菅野長吉

コンパクト・シリーズ 26

地方記者 菅野長吉

朝日新聞社

かんのちようきち
菅野長吉

1911年(明治44)福島県生れ。1935年(昭和10年)東京朝日新聞社に入社。地方記者を経て社会部勤務。戦後、地方支局長、本社デスクなど歴任。現在、朝日新聞東京本社編集局勤務、朝日テレビニュース社制作部長。

地方記者

定 価 230 円

昭和38年6月30日発行

著 者 菅野長吉

発行者 朝日新聞社 浜名二正

印刷所 明善印刷株式会社

発行所 東京 北九州 朝日新聞社
大阪 名古屋

目 次

かけ出し支局長	1
かけ出し現地報告	16
辺地記者	29
外野記者	46
雪国の独身記者	59
オートバイ記者	69
雪山記者	83
続・雪山記者	101
美談記者	115

追跡記者

開拓地記者

津軽の事件記者

休刊日記者

つんぼ記者

さいはて記者

さらば、地方記者

あとがき

かけ出し支局長

ルンペンストーブを囲んで、今夜も遅くまで、五人の支局の若ザムライたちと語る。談たまたま「地方記者」のことにおよんだとき、フッとだれかがいいやがった。

「……ともかくサ、支局長にだけは、なりたくねえな——」

一瞬、五人は顔を見合わせて沈黙し、やがていっせいに笑い出した。

——まったく、こんなはずじゃなかった！

僕は半月前に、花の東京から着任した。

「いよいよ支局長サマか——地方名士の仲間入りというわけだな。相手はみちのくのボスどもだ、しっかり頼んまっせ——」

社会部の同僚たちに肩をたたかれ、上野を発ったときの心境は、ほんとうは、まんざらではなかった（——俺も、一国一城の主か……）。

二人の子供といっしょに、まるで修学旅行の女生徒のようににはしゃいでいる女房を眺めながら、

思わずニンマリとしたものだ。

ソレ火事だ、殺しだと、目の色変えて都内をかけずり回った十五年間——あの三下暮しとも、や
つとこれでグッドバイできたと思うと、「事件記者」なんかにうつつを抜かしている連中が、こっ
けいにさえ思えた。

——ところが、あれからまだ半月だというのに、僕はすっかり参ってしまった。

まったく、こんなはずじゃなかった。

いふなれば、三等県の、三等支局長の悲哀である。

たしかに、「一国一城の主」には違いない。とにもかくにも、地方版という一ページ十五段の紙面
を持ち、一県の政治、経済、文化各般の通信を担当している。知事や代議士たちとも対等のつき合
いができるのだから、支局長は「地方の名士」の一人といえないことはない。

ところがその「名士」のいる支局たるや、なんともひどい。最先端をゆくべき新聞社の支局が、
改築予定がもう二年も延び延びになっている古さでは文化財的建物。

さらに、この「城主」が率いる輩下というのが、なんと県下に四人の通信局長と、三人の通信員、
それにたった五人の支局員という小勢だ。支局長とは、じつに一年三百六十五夜を宿直する、無給
の「夜警員」であることも、赴任の夜に支局員からコンコンと教えられてうんざりした。この「地
方の名士」は、じつは、十五段のノルマを埋めるためには、近所のパチンコ屋をのぞく時間も持た
ない「鉛筆労働者」であることも、数日ならずして了解した。

かけ出し三等支局長の悲哀は、書けばきりが無い。まず赴任当日からめんくらったのは、五人の支局員。なにしろ最年長の岩本が昭和十年生れで、以下、辻が十一年、松本が十二年、木原と小林が十三年生れときている。いずれも独身者。

「オールチョンガー」という支局は君のところだけだ。故意にやったわけじゃないんだが、まったく妙な人事だったよ」

通信部長が、しきりと自分で感心していたが、来てみて、これは感心するどころの段じゃないことがすぐわかった。

地方版づくりの中心は、県庁所在地支局の支局員だ。それがいずれも、かけ出しか、せいぜいそれに毛の生えた程度ときている。何千人かの中から選ばれた人材だそうだが、まず三人は、「目下訓練中」で、ものの用にはたたない。原稿ときたら、赤筆を入れはじめたら原型がなくなってしまう。

三等支局長どころか、こいつ々寺子屋の先生だった！と気がついたのは、一応五人の人物観察をすませた三日目だった。

さらに弱ったことは、この若い五人が、一人残らず酒好きときていることだった。どこの支局でも、一人や二人は甘党がいるものだが、ここはオール酔っぱらいだというのだ。

「おいどんはイモ焼酎で鍛えましたんで——」

九州生れだという岩本記者が、まず僕をおどろかし、それから後輩の酒量を詳細に報告におよん

だと、

「前支局長はノイローゼ気味でしたが、われわれの未明の訪問が原因らしいことが判明しましたので、これからは午前二時以後は、ご迷惑をかけないことを申合せました」と労働組合みたいな、おどしをかけてきた。

しかし、ともあれ僕は支局長である。ボロ局舎でもそこに住まねばならず、酔っぱらい局員のお相手もしなければならぬ。

五人の「訓練」は、さっそく翌朝から開始したが、その支局長開業第一日に訂正記事を出したのには、大いにくさった。

——朝刊の地方版しめ切りギリギリに発生した事件だった。ダンプカーに自家用車が衝突、さらにこれにトレーラーが突っこみ、火を出して四人が即死、二人が重傷を負ったという第一報。

目の前にぼやっとしていたのが、いずれも、かけ出しのデブの木原と、ノッポの小林。僕は格好の教育材料だとばかり、

「ソレ行けッ！」

と追出したが、これが失敗のもとだった。

二人がおっとりカメラで、現場にかけてみると、死んだのはトレーラーとダンプカーにサンディッチにされたあげく、トレーラーから火をつけられた自家用車の四人。運転していた男と、若い女三人が黒コゲ死体となっていた。乗用車は、トレーラーの下敷きとなって、ドアがぜんぜんあ

かない。警官の懷中電灯をかり、二人は車内の人数をかぞえた。明らかに男一つに、女の頭が三つだ。

現場写真を写すと、二人は大あわてで支局にとってかえしてきた。あとで聞くと、この二人の「かけ出し記者」は、これがはじめて手にかけて大事故だったという。現場を見るなり、デブもノッポもカーッとなってしまった。

「一人は写真をもって戻り、一人は現場に残ってその後にはわかったことは電話で吹込め」と僕がいったことも忘れてしまったらしい。ガン首をそろえて、息せき切ってもどってきた。

いなかでは珍しい大事故だったから、翌朝の地方版は「乗用車の四人即死、トレーラーとダンプの運転手も重傷」とトップで載ったが、この「四人」が、実は「三人」の間違いだった。

確かに二人の「かけ出し記者」が見たもう一つの女の頭は——じつはマネキン人形の頭だったのだ。最初に現場にかけつけた警官が、四人と報告した。二人の記者の頭にはその先入観念があった。死体はその直後にガラス窓を破って確認されたが、そのときはわが社の記者はおらず、それと知ったときは、すでに本社では輪転機が回っていたというわけ。

もちろん、この間違いはわが社だけ。

（やれやれ、この連中とのおつき合いじゃどうなることやら……）
つくづくと先が思いやられた。

支局長といえば、むかしはやたらと、大人物がいたらしい。どこの支局にも二十年、三十年前の、えらかった支局長の話がいまに伝わっている。黙って聞いていると、まるで偉人伝だ。

ところがこの僕はどうかだ。つい半月前まで、刑事の尻を追回していた平記者だ。人に使われてはきたが、かつて人を使つたという経験がない。十五年の杜歴にも、これといった武勇伝一つない。いまかけている支局長用の回転椅子さえ、腰がムズムズして落着かないというありさまだ。

半人前なのは支局員ばかりではないわい——新米支局長もぼつぼつ悟るところがあつて、お互いの勉強にまず週一回、土曜の夜にゼミナールを開くことにした。

その第一夜。真っ赤に焼いたルンペンストープを囲んで、六人が顔をそろえると、

「山賊会議だな、こらァ——」

木原剛介がうれしそうに感想をもらした。たった五人の支局員だが、完全に顔がそろうのは珍しい。そして、こう並べてみると、確かに木原記者の感想がびつたりだ。

部屋は——ススで真っ黒に汚れた天井、アカ切れの手のような無残な壁、クモの巣のような電話線。それに大時代なルンペンストープに薪の山——おまけに突出した五人の足が、泥雪をくつつけたゴム長ときている。

「うん。やがてここに一升ビンが二本ほど現れる、となると、小道具はそろふな」

岩本大輔が、舌なめずりしながらいった。ゼミナールどころかどうせ後半は茶ワン酒になり女の話になることぐらいはわかつているが、それも教育の一つと心得ている。支局長修業三週間の成果

だ。

成果といえば、このズウタイばかり揃ってバカでかい五人の男どもが、日に日に可愛くなってくるから妙だ。

岩本大輔。社歴四年。これでも当支局の最古参で、ことがあればデスクも勤める。県政担当のくせに、サツ回り時代に覚えた事件ものの味が忘れられず、殺してもあろうものなら、県議会であるうが、知事会見であろうがすっぱかして飛んでくる。M大柔道部の元主将で講道館五段の腕前。県警本部からは、無給の師範として喜ばれているが、ときには捜査課員に寝わざをかけ、強引に特ダネをとったりしていやがられている。

この男のアダ名が「ブツケ本番」。その由来は、四年の歳月を経ていささか伝説化しているが、話はこうだ。

入社して、支局に赴任したその朝、市内に火事があった。ちょうど支局長から訓辞をうけている最中だった。

「記事は手で書くのではなく、頭と足で書くんだ。たとえ三行の記事といえども、自分の目で確かめたものでなければ書いてはいけない」

二年前に定年退職した「鬼の武藤」のアダ名のある支局長だった。彼の話には聞くものを威圧する迫力があつた。そのときだった。支局の前を消防車がはげしい勢いで走りぬけていった。支局には二人のほかにはだれもいない。支局長の目玉がギョロツと光った。

「初仕事だ。いってこい！」

彼は鉄砲玉のように飛出した。そしてはるか前方をゆく消防車を見失うまいと必死に追跡した。支局には人間の足よりは少しは早い自転車というものがあるのだが、彼の目には入らなかった。

「なにがなんでも足で書かなければと思った」というのだ。火事場まで約一キロを走りに走った。そこまではよかった。現場につくや、そのまま焼跡に突進したトタン、彼はもんどりうって肥だめに転落した。

急を聞いて、鬼の武藤がサイドカーで駆けつけたそうだが、このとき鬼支局長にクソだらけの体を洗わせたということ、この事件のおかげで、新任の挨拶に一枚の名刺も必要としなかったということが、彼のいまもっての自慢だ。

そそっかしい九州男子。

辻正道。三年生で検察庁裁判所担当。つづく松本久は二年生で、教育、労働、市政。この二人もスポーツマンで、辻はラグビー、松本は山。

先輩の影響をうけてかどうか知らないが、この辻という男も変っている。アダ名が「カバさん」といわれるように、立派な体格の代りに、容姿の方は、あまり恵まれていない。そのくせ、支局随一のお洒落ときている。月給の半分は洋服と靴の月賦につき込んでいるそうだが、これがちっともはえない。

なによりも文章を書くのが最大の苦手という妙な新聞記者だ。それでいて、外国語の実力は拔群

で、英語、フランス語、ペラペラというから、きわめてピントの合せにくい男だ。生粋きうすいの江戸ッ子だが、いまは山形弁を縦横に駆使して、とても江戸ッ子とは見えない。

二年生の松本のアダ名は「シスターボーイ」。元〇大山岳部主将が「シスターボーイ」とはうなずけないが、発声から物腰態度まで、そのものズバリだから仕方がない。

山男のくせに、変に色が白く、男っぷりも五人のなかでは最上。教育、労働、市政担当で、一日中市内をうろつき回る仕事だが、県政の岩本が事件好きのように、この男は無類の辺地好きときている。

学生時代、山を歩きながら辺地の暮しに心をひかれたのが病みつきらしく、休日にはかならず出かけてゆく。開拓地に分校をつくらせたり、無医村に医者連れていたり、おかげで労働や市政記事は抜かれっぱなしだ。

つい先日、この男が、三日も行くえ不明になったのはびっくりした。

山男のことだから、まさか遭難ということはあるまいが、それだって絶対には断言はできない。三日目の朝は、その可能性も考えられ、捜索隊の準備まではじめたのだから、シャアシャアした顔で現れたときは僕もアタマにきた。

辺地の娘の結婚の仲人をやってきたというのだ。

娘というのは、先ごろ彼の努力ではじめて分校ができたS部落の農家の一人娘。この市から二十五キロも山に入った辺地だ。

そのA子が、分校の電気工事に來た隣県のY町の青年と恋仲になった。

ところが、娘の親が許さない。しかし彼女はもう妊娠していた。思いあまつた彼女は、その二十五キロの山道を一日がかりで越え、シスターボーイに援助を求めてきた。自分が一役買った点灯問題から派生した悲恋とあつては彼もすててはおけない。娘といっしょにS部落にゆき、一晚がかりで親を説得すると、さらに深雪の奥羽山脈を越えたY町の青年の家まで、娘を送り届けてきたというのだ。

——こんな男たちだ。

どうやら、三等支局長の前途は多難らしい——五人の顔を前にならべて、僕は思わずため息をついた。

しかし、あわてものの、ブツケ本番、君こと岩本大輔を筆頭に、書かざる記者の、カバさん、こと辻正道、山男の、シスターボーイ、こと松本久、それに、デブの木原剛介にノッポの小林真四郎と、こう並べてみると、なかなかバラエティがある。たった五人の支局長だが、駒の動かしようでは、この山寨のような支局だって、けっこう一城の守りは果せるらしいことが、どうやら僕にもわかってきた。

しかし、かけ出し一年生も終りに近づき、あと一カ月もすると後輩に新入社員を迎えようという木原と小林が、相変らずトンチンカンなことばかりやっているのは頭が痛い。二人とも仕事には熱

心。事あれば水火も辞さぬファイトと根性の所有者だから、頭から叱りとばすわけにはゆかないが、支局長ともあれば、いつも笑ってばかりはいられない。

交通事故現場で、車中のマネキン人形を本物の死体と誤報し、大恥をかいたのはつい先日。

「事件記者の支局長の顔を汚しました。申しわけありません」

二人ガン首をそろえて、そんな殊勝しゅしょうなことをいったが、その舌の根も乾かないうちに、またもやこのありさまなのである。

「再教育の必要あり、ですな。われわれもふくめて、ひとつ社会部記者教育をやってくれませんか」
いい出したのは岩本だった。

かくて毎週土曜日の夜、ゼミナールを開くことになったわけだから、かけ出しの二人が「山賊会議」とおそれたのも当然だった。

今夜はその第一回。

開会を宣したトタン、末席の二人が勢いよく立上がった。

「先輩諸氏、どうぞお手やわらかに——」

デブとノッポが、バッタのように腰を折った。

きのうの事件だ。

市内の小料理屋で、若い母親と二人の女兒がなにもかに刺された。この第一報をどこの社よりも早くキャッチしたのは、デブとノッポだ。ろくに原稿を書けないが、この二人、事件警戒だけ